

## 「けのび」の地平論的構造分析

戸高陽子〔鹿屋市立吾平小学校〕・高岡治〔鹿児島大学教育学部（保健体育）〕

### Horizon theoretical structure analysis of "Kenobi"

TODAKA Yoko · TAKAOKA Osamu

キーワード：けのび、浮くこと、水平姿勢、水の特性、地平論的構造分析

#### I. 問題の所在と研究目的

5月末になると、鹿児島県の小学校では、高学年の子どもたちと教員が一緒になってプール掃除を行う。藻の生えたプールの壁をたわしでこすり、泥の溜まった床をきれいにはき出すと、薄汚れたプールが見事に復活し、子どもたちは歓喜の声を上げる。ほとんどの子どもは、プールをきれいにした喜びと水泳学習への期待感から笑顔が絶えない。早く水泳が始まってほしいという声を聞くたびに、全員「できた」と実感できる水泳指導を行わなければ、と意を新たにす。

一方、水泳指導が始まることで教員の悩みもよく聞かれるようになる。「小学生は体が小さいから寒がるし体が浮きにくい。」「バタ足で足が曲がって前に進まない子がいる。」「クロールの息継ぎは横向きだから教えるのが難しい。」など枚挙にいとまない。同僚とできない子どもの実態や指導について話していくと、子どものつまずきを外から見た形で把握し、自分が正しいと思っている形を示すことで指導しようとしていることが多い。指導しても思うほどできるようにならないと悩んでいるのである。このような教員の指導の一例を挙げてみよう。浮かない子どもが浮こうとして全身に力をこめている。その一生懸命さを理解しながらも「力を抜くと浮けるよ。」と、プールサイドに立って浮く姿勢をして見せながら声をかける。教員の指導に間違いがあるわけではない。だが、この声かけによって子どもはどの力を抜けばよいのか分かるのだろうか。また、この話をしている教員は浮くためにどこに力を入れ、どの力を抜くとよいか分かっているのだろうか。話を聞きながらしばし思案し、わたし自身の指導の

あり方を振り返って自戒することが多い今日この頃である。浮くことができる指導者は、浮きたいのに浮かない苦しさや、力をどう抜けばよいか分からない学習者のとまどいを見まごして指導しているような気がしてならない。

水中では、人は息をすべて吐き出さない限り水の特性である浮力によって浮く<sup>6)</sup>。物理的に人間は浮くようにできているといえる。ところが、そうはいつでも浮けない人がある。浮こうとしているのに浮かないのだ。そのような人に科学的知識を教えて物理的に浮くことが頭で理解できたとしても、わたしの身体は思うように動いてくれない。

浮くことは、一見、水面で静止したかのような単純な動きに見える。外部視点から見れば単純に見える動きであっても、浮く動きの地平には様々な動感素材が複雑に絡み合いながら層を成して存在している。だから、浮けない人にとって「単純な動き＝簡単にできる」という図式は成立しない。それが見過ごされると科学的知識から「人間は浮けるのだから浮きなさい」という指導をしかねない。浮くことができるようになりたい学習者は結局自分で動きかたを模索しなければならなくなってしまう。指導者もうまくできない子どもが何につまづいているのか、どのような指導をすればよいのか、よく分からないまま毎時間水泳指導を行っていることが多いように思う。ならば指導者が動きかたを分析しその構造を知ることが、思うように動けない学習者に動きを発生させる一助となるのではないだろうか。

本研究は、筆者が勤務する小学校の子どもができる喜びを味わえる水泳授業を目指して、発生日

的論的運動学の立場で「けのび」を検討していく。「けのび」ができるようになるまでにどのような動きが「けのび」をつくっていくのか、自我の関与しない受動世界での階層性を明らかにすることによって小学校の子どもたちに「けのび」を発生させるための指導内容の一資料を得ることを目的として行うものとする。

## II. 地平論的構造分析

金子はフッサールの言葉を引用して「すべての志向体験は地平をもって」<sup>3-p. 248)</sup> いることを指摘し、さらに動感志向性の「意味核をなす含意潜在態は動感地平の構造分析によってはじめて明るみに出される」<sup>3-p. 242)</sup> と述べ、受動的な動感深層の地平分析の重要性について指摘している。また、動感形態は能動的な志向性を働かせてよりよい形態に統覚化していくこともあれば、自我の参与しないままに受動的に機能することもあり、学習者に身体知を発生させるためにはその動感化現象の地平を詳細に分析する必要があることを指摘している<sup>4-p. 103)</sup>。自我の参与しない受動的志向にはさまざまな動感素材が複雑に絡み合っており、動きが発生するときにはそれらが連合し触発して能動的志向に対向してくる。これらはフッサールのいう受動的綜合において説明されるものである。新田は、フッサールは対象に対する意識は大きく能動性と受動性に分けられ、受動性はさらに受動的原志向性と触発の段階があり、触発を受けて能動性である受容的な自我対向から自発的な高次作用へと四段階の層を成す構造をもってしていることを明らかにした、と述べている<sup>5-p. 90)</sup>。フッサールはこの自我が働かない受動的志向においてもすでに一定の構造と分枝化を有しており対象意味としての統一性をもってしているという。この統一を受動的綜合とし、その機能を連合と名付けている。

以下に「けのび」の地平構造に存在する動感素材について検討し、深層における受動的綜合を明らかにしていくものとする。

### 1. 「けのび」の動感素材

#### (1) 水中で運動するということ

「けのび」を発生させるには、水という環境の

なかで陸上とは異なる動きかたを身に付けることが必要である。「けのび」を行うプールには、水の抵抗、浮力以外にも水の温度や水圧、気泡などの水の特性<sup>6)</sup>が存在し、わたしはそれによってうまく動かすことのできない身体と向き合うことになる。わたしが水に出会う場の一つがプールであり、そこでは常に水の特性に合わせた動きかたをしなければならない。有機体であるわたしは動こうとして常に環界である水に働きかけ、水も常にわたしに浮力や抵抗などで働きかけている。わたしも水も同時に関係をもっていて、どちらが先とも後ともいえない。ヴァイツゼッカーは、自己運動は環界の力の成立とその方向それ自体に関与しており、運動形式の発生は有機体の力と環界の力との合成力である、と述べている<sup>7-pp. 220-221)</sup>。有機体と環界は同時に交互に作用し、閉じた円として表せる。この有機体の運動形式の発生をゲシュタルトクライスと名付けた。わたしはプールに入ること、常に水と関わりながら動くという運動感覚を発生させ、この運動感覚を絶えず生成し続けることで水中運動を行っている。わたしと水の関係が築かれるということは「環界と自己の身体部分との両者が共に関与」することにより「自己の身体の一部はいつてみれば環界の一部となっている」<sup>7-p. 285)</sup> ことであり、わたしの身体の一部が水の一部となっているということがいえる。水中運動をしていると、水とのふれあいを楽しく感じ、水と一体になったかのように感じることもある。この水との一体感は、わたしが水の一部であり、かつ水がわたしの一部となり得る関係性から成り立っている。

プールで歩いているとき、ふいに足が滑って転びそうになることがある。それまでできていた運動が何かの拍子に崩れてしまうことは、運動中や日常生活ではよくある。プールで歩くという主体を生成し続けていたわたしは、何かのきっかけで足が滑ることにより主体を生成し続けられなくなる。この危機をヴァイツゼッカーは転機と名付けた<sup>7-p. 273)</sup>。そして「主体が転機において消滅の危機に瀕したときにこそ、われわれははじめて真に主体に気づくのである」と指摘する<sup>7-p. 277)</sup>。プールで歩いているときには前に進むことや周りの景

色に注意が向いているが、足が滑ると安定していた運動が続けられなくなり、そのとき初めてプールで歩くという動きに目が向く。足が滑ったとき、プールで歩くという主体がまさに消滅する危機に瀕したのである。この転機についてヴァイツゼッカーは「一つの行為から次の行為への移行を導くものは転機である」と述べている<sup>7p. 289</sup>。われわれは足が滑って転びそうになっても、水の浮力や抵抗を利用して傾いた身体を修正しまた歩き続けることができる。それゆえヴァイツゼッカーは主体を所有するためには絶えず獲得し続けなければならない、と指摘する<sup>7p. 277</sup>。また、ヴァイツゼッカーは転機の構造をパトス的カテゴリー（したい）意志、〈ねばならぬ〉必然、〈しうる〉可能、〈すべきである〉義務、〈してもよい〉許可によって説明できるとしている<sup>7pp. 293-296</sup>。足が滑り体勢が傾いて転機が訪れたとき、〈歩きたい〉という意志と〈歩かねばならぬ〉という必然との抗争がおきる。わたしが〈歩きたい〉のであれば、その意志が〈歩くことができる〉か〈歩くことができない〉のかを決断し、〈歩くことができる〉ならば〈歩いてよい〉という許可を与え、わたしは再び歩き続ける。運動が崩れそうになっても〈歩きたい〉という意志のもと、決断が行われて新たな主体を常に生成し続けている。それゆえに体勢を整えて再び歩き出すことができる。体を立て直すことができるということは、環界もわたしに働きかけているという水とわたしの関係性を、わたし自身が理解しているからにほかならない。

水中では、浮力や抵抗を感じながら動かなければならず、陸上での運動と大きく異なる。浮力や抵抗などの水の特性は、わたしの動きを制限する一方で助けてくれることもある。これらのことをわが身にありありと感じとることができるとき、水中で運動する感覚を身に付けたとすることができる。これはなじみの地平として「けのび」を支える動感素材の一つになると考えられる。

## (2) 絶対ゼロ点

「けのび」をはじめ、すべての動感形態の原点となるのが絶対ゼロ点である。金子は絶対ゼロ点

についてフッサールの言葉を引用して「どんな知覚においても、時間性としての現在が構成され、その現在のなかには絶対的な今が構成される。…この時間性に向けられたゼロ点としての絶対的な今に対応するのが、すべての空間性に向けられたゼロ点としての絶対的なここである。どんな外的知覚でも、空間性のアクチュアルな〈今〉を伴い、その空間的現在のなかにそれ自身とともに〈ここ〉という絶対ゼロ点を伴う」と説明し、また「ゼロ点というのは前後・左右・上下といった志向的体験のなかに現に内在する含意態としての関係点であり、一つの極限点」と述べている<sup>4p. 198</sup>。自然科学的座標系におけるゼロ点は任意の原点であり、発生論的座標系におけるゼロ点はわたし自身である。金子は、どんなときにも自我身体の絶対ゼロ点から逃げ出すことはできない、なぜなら私自身がゼロ点だから、ゼロ点から逃げ出したら私は存在しなくなる、と指摘している<sup>4p. 198</sup>。自我身体の絶対ゼロ点を起点として動感形態は発生する。

先にも述べたように、水中は日常で生活している陸上と環界が大きく異なる。そのため、わたしはプールに入ることでも水中での絶対ゼロ点を形成することになる。身体の大部分を水につけ、その上でわたしを原点とする絶対ゼロ点を確立することが水中運動の大前提となる。水中で絶対ゼロ点をつくれぬ人は、プールに入ることができないことを意味している。プールに入り、水の冷たさや圧迫を感じつつも水中という空間に〈今〉居続けるわたし、それが水中で自己運動をするわたしであり、わたしを原点とする絶対ゼロ点が確立しているといえることができる。この絶対ゼロ点を起点とした動感化現象として「定位感」や「遠近感」が挙げられる。

## (3) 定位感

金子は「動感化原点領野のなかにもっとも基底的な本質法則としてまず定位感法則」を取り上げ、「主体として自由に自ら動き、状況に応じた行動をとるとき、わが身の運動を絶対ゼロ点から今この方位性を感じとる必然的な本質可能性が定位感法則である」と述べている<sup>4pp. 197-198</sup>。水

中運動における方位性は、陸上の運動とは異なっている。そのため金子のいう「定位感」は水中運動における動感形態を身に付けるときに大きな課題として主題化される。

「けのび」は壁を蹴ったあと、水中で水平姿勢になりうつぶせになったまま〈前〉に進んでいく。このときわたしにとっての〈前〉は顔の向いている方向ではない。頭上にある数メートル先の水面の方向がわたしにとっての〈前〉である。

陸上で水平姿勢を保とうとすると地面に接地するかしかない。水中だと水平姿勢を簡単にとることができる。水中は水の特性によって体位を自在に変えて運動することが可能である。例えば、シンクロナイズドスイミングでは倒立位のまま水中から水上へ浮上し足技を行うことができる。このときシンクロナイズドスイミングの選手は、体位がどのように変わっても前後左右や上下が分からなくなることはない。もし水中で分からなくなれば溺れてしまう。シンクロナイズドスイミングの選手や泳げるすべての人にとって〈前〉というのは常に自明のことである。

ポイテンデイクは、人間や動物における方向感覚や位置感覚は物理的に働く原因としての力ではないことを指摘している<sup>1pp. 117-125</sup>。運動の結果としてあらわされる物理的な時空概念はどんなときにも等間隔に刻まれるものであり、状況によって変化することはない。わたしが〈今〉〈ここ〉で動いているときの位置感覚や方向感覚、時間意識は、わたしを原点として規定されており、運動の意味や状況によってそのつど変化する。水中運動における〈前〉という概念においても固定された物理的な空間や数学的座標点では決してない。立位や倒立位になって天地空間が変わろうと演技をし続けることができるのは、わたしから放射される方向性があるからである。状況や動きかたによって、わたしを原点とする絶対ゼロ点から方位性が投射され〈前〉を規定している。

小学校で水泳の授業をしていると体を水平にすることを強固に嫌がる子どもがいる。陸上で〈前〉に歩きなさいとか〈後ろ〉に歩きなさい、などと指示をすると〈前〉と〈後ろ〉を取り違えることなく歩いていく。しかし水中で水平姿勢に

なろうとした途端、前後左右や上下、天地が分からなくなり混乱してしまう。プールを立位で歩くときは陸上で歩くのと同じ方位性でよいが、水中で水平になると体の向きが変わり方位性が変わる。状況に応じて変化させられる方位性をもっていなければ水平姿勢をつくれないのである。ポイテンデイクは「空間における定位がなければ、いかなる動物や人間の生存も不可能」であると述べている<sup>1p. 117</sup>。水中で運動することは、水によって呼吸が遮断され常に生命の危機と隣り合わせである。水中運動において定位感を身に付けることは生存に関わることといえる。

#### (4) 遠近感

勢いをつけて水中に深く潜るとしよう。足がつくプールならば、水中で膝を曲げ水上で大きく伸び上がると、その反動で深く潜ることができる。水泳や潜りを専門にしていない人は、息が続く限りできるだけ長い時間潜ろうと思っても、身体が次第に浮いてきて水中深くに長く留まることはできない。このとき、水平姿勢や両膝を抱え込む姿勢など、たとえどのような姿勢であっても、わたしは水面が近づいてくるのを感じることができる。水面を見ているわけではないのにそれが分かる。水面とわたしとの距離は、物理的に測っているわけでも目測でもなく、あとどれくらい待てば水面に浮くかが分かる。まるで背面に目がついているかのように水面との距離を感じるのである。このとき、水面は、水中にいるわたしにとってはまだ先のことである。水面に浮くという未来の運動を〈今〉〈ここ〉に引き寄せることで、水面がわたしにはまだ〈遠い〉のか、それとももう〈近い〉のかを差異化し〈遠一近〉をわが身で了解する。金子は「動感化原点からの隔たりを先反省的に直接に自我身体でとらえる本質可能性」を「遠近感法則」としている<sup>4pp. 198-199</sup>。わたしは動感化された時空意識「遠近感」によって水面までの距離と時間を測っていると考えられる。浮くときに感じる水の特性の変化から、内在知覚が距離や時間を測っている。「わが身に同時に居合わせている遠近感の本質可能性は自我の参与しない受動動感世界にある」<sup>4p. 199</sup>が、深く潜り過ぎたとき

は「遠近感」が働いて水面まで「遠い」と判断し、早く上昇するようわずかに身体を動かす。水中で状況に見合った動きをするには、動感化された「定位感」と「遠近感」がなければ、わたしはそう動くことができない。

## 2. 「けのび」の動感構造

「けのび」ができるようになるには、「浮くこと」と「進むこと」という二つの動感形態が関わっていると考えている。この二つの動感形態が形成するまでにどのような動感素材が必要で、それらがどのような過程を経て「けのび」の発生につながっていくのか、その様相を分析していくものとする。

### (1) 「浮くこと」ができる

#### a) 「浮くこと」を支えている動感とは

浮くために獲得しなければならない動感として、先に述べた水中で動く感覚が挙げられる。水中で動く感覚を獲得するには、プールに入り立位姿勢での絶対ゼロ点、定位感を形成し、立位で浮くことを獲得することが必要となる。こ

こで得た動感は何度も繰り返すことによっていつでもできる動きとなり、次第に触発の力を失い受動世界に沈殿していく。そして新たに立位姿勢から水平姿勢での絶対ゼロ点、定位感、定位感に基づいた遠近感を獲得し、水平で浮く動感を形成していく。立位で浮く動感は過去に沈殿しているが、水平での浮くを支えており、また水平で浮く動感水中で動く感覚を支えている。つまり、これらの獲得した動感層を成して形成され、よりなめらかで充実した動きへと発展していくのである（図1）。

これらは浮く動きを支える動感として最下層に沈殿している。問題なく水中運動をしているときには受動的原志向として沈んでいるが、水中で転んだり、深く潜り過ぎたりして転機が訪れたときには、身体を立て直そうとする能動的志向として意識されるものでもある。

#### b) 「浮く」動感意識の反転化現象

「浮きたい」というフッサールのいう能動的「原努力」<sup>3-p. 249</sup>によって習練を重ねると、動感素材である絶対ゼロ点と定位感が同質性として

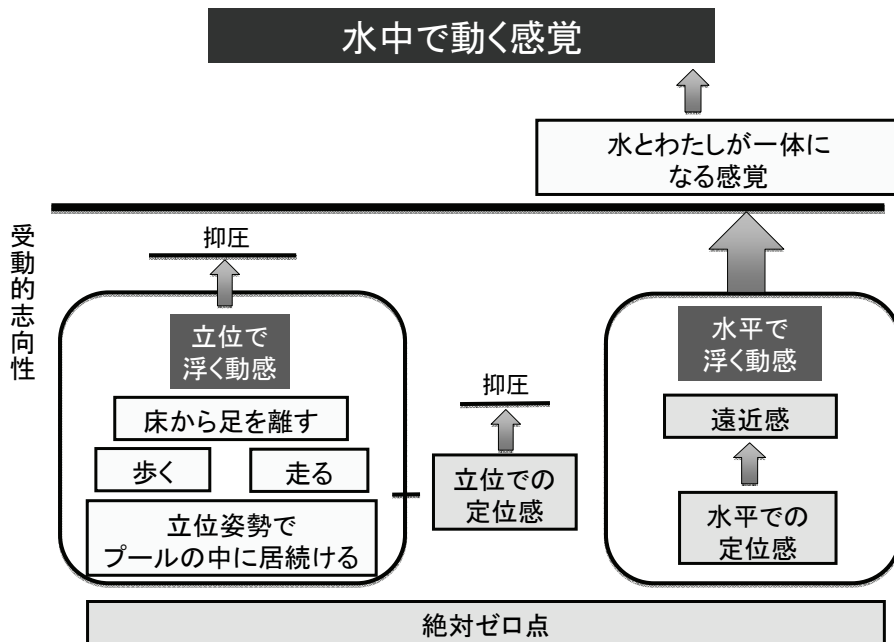


図1 「浮くこと」の最下層における動感形態

まとめ、またあるときには定位感と遠近感が同質性としてまとめ、またあるときは水中で動く感覚と定位感がまとめながら、次第に水の特性を自分に取り込み、触発されて「浮きそう」につながっていく。この水の特性を自分に取り込むことができると、浮いている状況が分かり、足を床から離せる「浮ける」になり、次第に浮かされていることが分かるようになる。こうして、浮いていることが分かる動感や浮かされていることが分かる動感が形成されていく。

「浮く」動感発生にあたっては、差異化されつつ現れと隠れの二重構造の現象が見られる。金子はフッサールの言を借りて、この二重構造を右手で左手を触る例で説明している。右手で左手を触るとき、左手は触れられているのを感じ、右手は左手に触れられているのを感じる。〈触れるもの〉と〈触れられるもの〉は転換可能性を示し、この志向体験には目的論的な反転化可能性が含意態として存在することを示唆している<sup>4p.194</sup>。さらに金子は、両方の手が同時に〈触れるもの〉や〈触れられるもの〉になることはなく、触れる手と触れられる手は交代し合う、つまり反転化し合う関係である、と述べている<sup>4p.194</sup>。「浮いているのが分かる動感」と「浮かされているのが分かる動感」が同時に意識されることはなく、わたしは何をするのかという目的論的行為によって浮く動感意識は反転化する。この反転化できる動感化能力がうまく機能するようになったとき、自ずから浮くことができるようになると考えられる。

c) 「沈む」が「浮くこと」ができるにつながる

「沈む」は、「浮く」ができて初めて身に付けることができる動きである。呼吸が遮断される水中であっても浮くことが分かっていると沈むことができる。もし浮かないのであれば沈むことは死を意味するため、とても怖くて沈めない。人は沈んでも沈み続けることはなく、必ず水面に浮く。「浮く」は沈んだあとにやってくる。このことから、沈む際には水面に浮くこと

が先取りされていることが分かる。水面に浮くことを沈む〈今〉〈ここ〉に引き寄せているからわたしは「沈む」ことができる。金子は、動感身体の始原に据えられる能力は〈体感身体知〉と〈時間化身体知〉の二領域をもち始原的な形態発生はその両面に問いかける、と述べている<sup>2p.2)</sup>。浮くための動感素材である絶対ゼロ点や定位感、遠近感は、「ここ」や「隔たり」を感じる体感身体知ということができる。そしてこの体感身体知は、「過ぎ去った動感意識とこれから起こる未来の動感意識とをともに今この私の身体意識に引き寄せる」時間化身体知<sup>3p.266)</sup>としても働く<sup>3p.266)</sup>と述べている。このことから「沈む」動きには、「沈む」という〈今〉に、過去の動感意識である定位感や遠近感を引き寄せ、「浮く」であろう未来の動感意識を〈今〉に引き寄せる、時間化する動感意識が不可欠であるといえる。

この二つの身体知は「沈むこと」ができる動感の発生に関わってくる。「沈みたい」という原志向性においては、「浮くことが分かる動感」と「浮かされていることが分かる動感」が反転化し合う関係として同質性のまとめりとなっている。これを浮かないようにする動き、つまり「沈む」動きにするには体感身体知である遠近感や定位感が必要である。体感身体知は時間化身体知としても働くため、自分はどこにいて、水面までどれくらいあるのかが分かり、浮力に身を任せて浮いてくるのを待つという動感が形成される。浮いてくるまで待つことができるということは、沈んだ身体が浮力によって浮き上がってくるのを感じとる力をもつということである。この浮き上がる動感が受容的に自我対向し、わたしは「沈める」ようになる。何もつかまらずに沈み込み、その後プールの床から足を離して水に身を任せることができるようになれば、わたしは沈むことができる能力性を獲得したといえる。

沈むことができれば、膝を抱え込む浮きから、ふたり一組で行う「まりつき」や「股くぐり」など、浮くと沈むが組み合わせさせた動きへと発展できる。これらの水遊びを行いつつ、い

ろいろな体位での浮き上がりを差異化させ、より高い位相の浮きを獲得できると、「くらげ浮き」で完全に体の力を抜いた浮きができ、体を水平にした「伏し浮き」と充実した浮きができるようになる。

人は水遊びや浮き沈みを繰り返しい、動感素材の連合を経て、ようやく「浮くこと」ができる力を獲得するのである(図2)。力を抜けば浮けるとか、人間は浮くようになっている、という言葉かけや科学的知識だけで浮けるようになるのは難しい。

したがって「浮くこと」ができるには、浮くために必要な動感素材を身に付けていること、できそうな予感から反復化する努力志向性をもって、繰り返すなかで動感素材を差異化しそれを総合すること、などが必要だと考えられる。わが身にありありと感じ取れる動感体験流のなかに直観されるこれらの内在知覚と向き合わなければ、人は「浮くこと」ができるようにはならない。

(2) 「進むこと」ができる

a) 進む動感素材

進むには「進みたい」という原志向のもとに、これまでに獲得した能力性や動感が受動的に総合されることになる。「浮く」動感や「沈む」動感は、反転化し合う動感素材として受動的志向に沈んでいる。さらにその下層には、水中で動く感覚や定位感、遠近感が「浮く」、「沈む」を支える動感素材として沈んでいる。これらは階層性をもって沈殿している。

b) 進む動きにおける反転化現象と反論理的現象

熟練者の「けのび」は、水に潜ったままプールの壁を蹴って進み、水面に浮く。「けのび」は手足を動かして進むのではなく壁を蹴ることで推進力を得る。「けのび」で身体を水中に沈めるときには、定位感や遠近感に支えられた「浮く」と「沈む」動感が働いている。この動感と壁に足を接地する動感、膝を屈曲する動感が同質性をもち、また両腕を伸ばし上半身を水平に構える動感や蹴り出す動感もこれらの動感

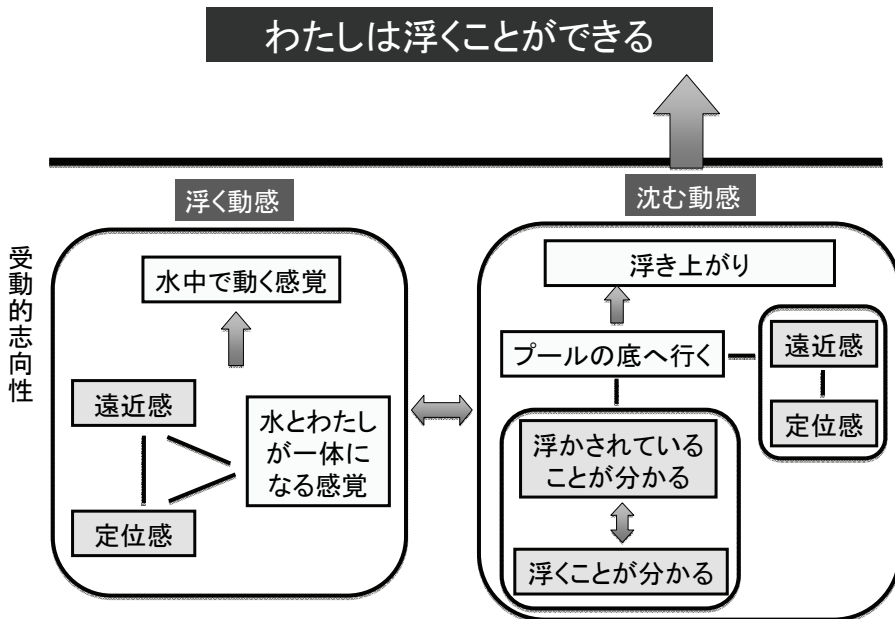


図2 「浮くことができる」動感形態の構造

素材と結合しグループ化している。これらが統一されて壁を蹴る動感が形成されていく。

また、蹴ることで得られた推進力はなるべく持続させて、より速くより遠くへ進みたい。そうするには、もっとも抵抗の少ない姿勢である水平姿勢をつくる必要がある。できるだけ速く、速くに到達するために手の先からつま先まで全身を緊張させている。この姿勢は身体をまっすぐに引き伸ばした形態であるため、抵抗は少ないが浮力の影響を受けやすい。水中を滑るように進みながら、変化する水圧や抵抗、浮力などを感じ、そのつど力のいれ具合を調整しつつ浮き上がっていく。もし途中で力を抜いたりまっすぐな姿勢が何らかの原因で崩れたりすれば、環界の力によって急浮上し進むことが阻止される。水中で進むには変化する環界の力に応じて、水平姿勢を保つ動感と浮き上がる動感が反転化し合う関係として連合している。これらのことから進む能力性には、水中に潜ったままプールの壁を蹴る動感と、水平方向に環界の抵抗や浮力などを全身で感じつつ浮上していく進む動感が形成される必要があるといえる。

ただ、蹴る動感と進む動感と同時に現れることはない。蹴って進む動きは、蹴ると同時に進む動きに変わっている。ヴァイツゼッカーは、生命には「意味のある矛盾」があるため「なにかがちょうどそこでひとつの存在を失うと同時に、ひとつの存在を得る」のだといい、そのような状況を「反論理的」と名付けた<sup>8-p.95)</sup>。蹴って進むという動きはまさにヴァイツゼッカーのいう反論理的な動きといえる。水中に沈むときには壁を蹴ることが能動的志向に上っているが、蹴ると同時に蹴る動感を受動的志向に沈み、進む動感が能動的志向に現れる。「けのび」で進むためには蹴る動きが不可欠のだが、蹴ろうとするそのときにはすでに進む動感が受動的志向で生成されている。能動的志向では蹴ってもいなしから進む動感が体感されることはない。その意味で蹴る動感が失われなければ進むことはできないのである。

これらのことから蹴る動感と進む動感層を成し、蹴る動感が進む動感を触発していることが分かる(図3)。この進む動感を自我が受動的に受け止めることによって「進める」が発生

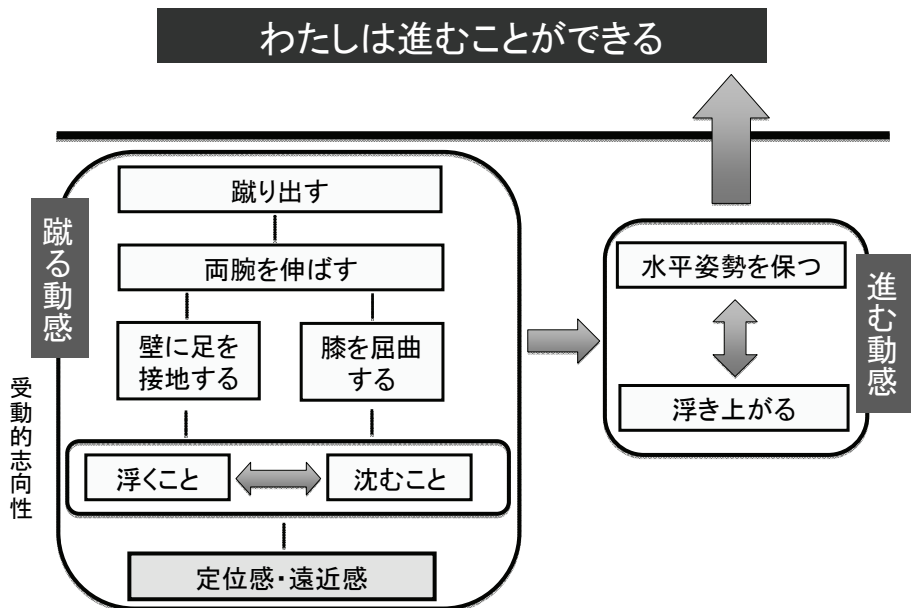


図3 「進むこと」の動感形態



し、これが目的論的努力志向性によって「進むこと」ができるに発展していくものと考ええる。

ゲシュタルトと時間／アノニューマ. 人文書院, 1995.

### Ⅲ. まとめ

本研究は「けのび」の受動的志向を探り、その地平にどのような階層があるのか検討するために地平論的構造分析を行った。水に入ったそのときから、水の特性を利用して運動するのが水泳であり、浮くまで動感素材をまとめなければならないことを明らかにした。また沈むには浮く動感がなければ水中に沈むことができないこと、沈むことができたなら浮き上がる動感を獲得できること、そしてこれまでに獲得した動感を差異化し、反転化させて進む動感を形成していること、などについても明らかにした。「けのび」の受動的志向を少しは解明したように思うが、浮くことが立位と水平とで、その動感が異なることを簡単に記すことしかできなかった。また、「けのび」の発生に至るまでに検討した動感形態がどのように様相化しているのか、その分析までは辿り着いていない。動感形態の構造分析とその発生分析は互いに相補性を持ち、小学生に「けのび」を発生させるには不可欠な分析となる。地平論のさらなる構造分析と「けのび」の発生に至る様相化分析については今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 1 ボイテンデイク／濱中淑彦訳：人間と動物 比較心理学の視点から. みすず書房, 1995.
- 2 金子明友：身体知の形成(下). 明和出版, 2005.
- 3 金子明友：身体知の構造－構造分析論講義－. 明和出版, 2007.
- 4 金子明友：スポーツ運動学－身体知の分析論－. 明和出版, 2009.
- 5 新田義弘：現象学とは何か. 講談社, 1992.
- 6 日本水泳連盟・日本スイミングクラブ協会：水泳教師教本. 大修館書店, 2006.
- 7 ヴァイツゼッカー／木村敏, 濱中淑彦訳：ゲシュタルトクライス 知覚と運動の人間学. みすず書房, 1995.
- 8 ヴァイツゼッカー／木村敏訳：生命と主体－